41. 琴奨菊の引退

大相撲の元大関の琴奨菊が現役を引退した。立合い時の猪突猛進や特徴的な「がぶり寄り」、それに取組前に胸を大きく反らす「琴バウアー」が見られなくなるのは寂しい。

36 歳で現役の関取では最年長だった。平成 28 年の初場所で初優勝したが、それは日本出身力士としては 10 年ぶりとなる優勝だった。その時の模様はテレビで見ていたのでよく覚えている。が、その後は左膝などの故障で振るわず、平成 29 年の初場所で負け越して大関から陥落し、その後も番付を下げ続けたためテレビでもほとんど見なくなった。今場所は十両であった。だが、幕内には 15 年も在籍し、19 年の土俵人生だったという。成績を調べると次のようなものだった。

通算成績は 828 勝 676 敗 41 休（112 場所）。幕内在位 92 場所は史上 7 位、幕内連続在位 91 場所は史上 4 位、幕内通算 718 勝は史上 6 位。幕内優勝 1 回、殊勲賞 3 回、技能賞 4 回、大関陥落後に金星 3 個。

私の好きな琴奨菊の相撲の特徴は、素人目には立合い時の突っ込みと重い腰を生かした「がぶり寄り」だった。「がぶり寄り」を改めて調べてみると、「相手の廻しを自分の方へ引き付けて腰を上下に揺り動かしながら寄り進むことである。寄り進むうちに相手の腰が浮き自身の腰が相手より低くなる形が理想型とされる。」とあった。その通りだ。かつては双葉山のがぶりが絶品とされていたらしい。琴奨菊の「がぶり寄り」が絶品かどうかはわからないが迫力があった。

もう一つの立合い時の突っ込みも印象が強い。低い姿勢から頭を下げて突っ込むため、相手の変化にあっさりと屈してしまうのをよくみた。大関復帰を目指していた時、相手の立合いの変化で叩き込まれ大関復帰を逃した。稀勢の里の変化に負けたのも覚えている。

相手を見ずに突っ込む立合いに、私は「少し考えたら」と何度も思ったことがあるが、琴奨菊は一向に止めなかった。だから自身は絶対に変化しなかった。一つの男気とでもいうのか。そこが好ましかった。変化を警戒しての立合いでは迫力を欠く。思い切りぶつかり合うのが大相撲の神髄なのではないか。相手にとっては必ず突進してくるので、変化すれば勝つ可能性は高くなる。それを行うかどうかに一つの評価が付きまとうことにもなる。「勝てばよい」だけではなく、勝ち方が問題になる。いさぎよさ（潔さ）と無警戒さの問題でもある。

ならばどこまでが「変化」なのか、と言い出すと難しくなり、興醒めでもある。

大関の座から十両に落ちる間には、辞める時期についての葛藤があったに違いないが、逆に生きざまを見せることになったのかも知れない。記者会見で、「長く相撲を取ることを追究してきたのではなく、自分を追究したら長くなった。そこで自分の取りたい相撲が取れないと感じたので（引退を）決めた」、「まだできるならば相撲が取りたいというのが本音だ」と語ったというからまさに生きざまだ。

「満身創痍で最後まで自分の相撲道を貫いた」と評価される一方、出身地の福岡県柳川市に本場所で 1 勝するごとに 1 万円を寄付する優しさもあった。力強い取り口と同時に、弟弟子などの指導で人柄が慕われたとも言われる力士であった。今後は秀ノ山親方として後進の指導に当たるという。立派な親方になるに違いない。（2020 年 11 月 19 日）